

飛鳥と明日香と阿邪訶(あざか)

明日香は阿邪訶にあてた良字

白崎 勝

1、飛ぶ鳥の明日香

奈良の飛鳥、明日香の由来が謎になっている。飛鳥をなぜ「あすか」と呼ぶのか、また「明日香」のすばらしい地名は、どこから来たのかという謎である。万葉集に、この飛鳥と明日香が登場する歌がいくつかあり、次はその一つである。

飛鳥（とぶとり）の 明日香の里を 置きて去なば
君が辺は 見えずかもあらむ 元明天皇

藤原京から平城京に遷都した、この女性天皇の歌は、明日香の枕詞として、飛ぶ鳥を使用している。この明日香の枕詞から、飛鳥（とぶとり）と書いて「あすか」とも呼ぶようになったかもしれない。そうならば明日香の枕詞が、なぜ飛ぶ鳥なのかという謎になってくる。

最近の研究では、「飛鳥」考（浜田裕幸・歴史研究第638号）の報告がある。そこに枕詞「飛ぶ鳥」がなぜ「アスカ」に懸かるのか、これまでの説を紹介している。定説はなく、例えば井手至は「朝明け（あさけ）に飛ぶ鳥のイメージをもとにして、類似の音を持つ「アスカ」にかけた。同様に鳥から「朝」とか「脚」を連想し、類音をもって「アスカ」と連結する説が多いことや、和田萃（あつむ）は枕詞とは関係なく、「アスカ」と「飛鳥」を朝と鳥を介して説明していると載せている。

一方、浜田裕幸自身は発想転換で、飛鳥時代の朝廷が、他国の首都の名称に比肩する、好字として「飛鳥」を採用した説である。なぜ「飛鳥」になったかの説明等は本文を参照願いたい。

私はこの「飛ぶ鳥の明日香」の枕詞誕生には、あるできごとが関係していると考えている。これまで全国にある高取山・鷹取山は、神武と日本武尊の二つの東征隊が、進んだ方向を記録したベクトルであるということを見つけ、調べてきた。この調査の内容は著書「たかとりが明かす日本建国（2010 梓書院）」で報告した。この高取山・鷹取山は二つの東征の第1層の記録で、高がベクトルの矢尻、鷹は矢先である。第2層は高尾山で、高雄山や鷹尾山を含めて全国に56山ある。第1層のベクトルを補佐し東征隊が進んだ経路、遠征先などを記録していた。第3層は高尾山の高の一文字を変えた○尾山で、東征途次のできごとや、越えた峠などを記録していた。全国に177山見つかっている。この高が高天原の高であることは容易に推測できる。

同音の高取山・鷹取山は文字では容易に区別できるが、講演などで話すときは、「高い高取山」「飛ぶ鷹取山」と、枕詞を付けて区別し話していた。東征隊も、村人に名付けた山名を説明するとき、高と鷹を区別し説明したと考える。鷹取山では身振りを交えて「飛ぶ鷹取山」や「飛ぶ鳥の鷹取山」と、説明していたと想像する。

2、高取町の高取山

右図は全国の高取山と鷹取山の分布である。高取山が 18 山あり、鷹取山は 17 見つかったいて、一つだけ対になっていなかった。奈良県五條市の高取山 (L1) のみ、対の鷹取山が見つからなかったのである。最近になり、隠れた鷹取山があることが見えてきた。それが、明日香村の隣にある高取町の高取山である。

神武は八咫鳥の先導で熊野から、山々を越え宇陀に出ると、兄磯城・弟磯城との戦いを前に、軽装の兵を連れて吉野巡幸を行い五條市に出ている。五條から宇陀に戻っているが、この時のベクトルの出発地が五條の高取山 (L1) だったのである。そして、ベクトルの対は高取町の高取山だ

と思われる。この高取山は改名後の名前で、改名前は「飛ぶ鳥の鷹取山」だったと考えた。そうだとすると、このベクトルが示す先は、宇陀の高倉山に向かっている。

この高倉山は、神武が吉野巡幸から戻り、国見した山と日本書紀は記している。訪ねてみると、登り口から 10 分ほどで登れて周囲も同じような山があり、とても戦況を見るにふさわしい山ではなかった。この山は東征の後を追ってきた豊受大神 (台与) が、高倉下の案内のもと神武と再会して、この時、神武を大王に推戴したところと考えている。ベクトルの先としてふさわしい場所である。神武はこの後、橿原宮で即位したと書記にあるが、倭国女王だった豊受大神の記載がない。宇陀で、すでに神武を大王に推戴していたので即位には立ち会わなかったと思われる。東征後の国造りに九州北部勢力と、南部勢力で別れることを懸念していたのである。丹波に身を引いた豊受大神らしい、よく考えた行動と言える。

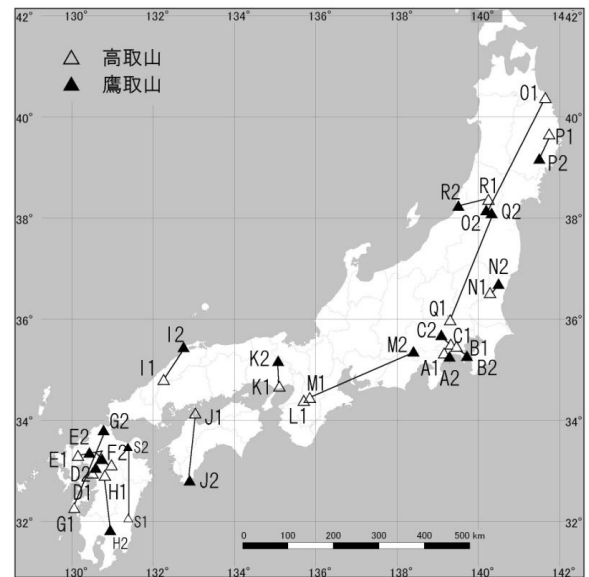
3、日本武尊東征は神武東征の延長

驚くのは、この五條から高取町のベクトルを延長すると、身延町の鷹取山につながっていたことである。(右図)

これまで高取町の高取山と身延の鷹取山は、日本武尊東征の出発のベクトルと考えていた。神武東征が最後に残したベクトルと、日本武尊東征の出発のベクトルが直線につながっていたのである。

五條の高取山は小さく目立たない山である。まず、神武東征の目的地・橿原に近い高取町に鷹取山 (高取山) が設定され、その後、宇陀の高倉山を指し示すように、五條の高取山が設定されたと考える。

日本武尊東征は、神武東征と同じように、高取山・鷹取山によるベクトルを残しているので、神武に続く一連の国づくりの事業と捉えていたことは明らかである。日本武尊東征は、敢えて



このベクトルのままに進んで、身延の鷹取山に向かったと考える。

もし神武の吉野巡幸が、次の東国東征を想定した巡幸で、このベクトルを残すためだったとすれば、建国計画の遠大さに驚嘆する。

4、「飛ぶ鳥の明日香」の誕生

甘樫丘の飛鳥川東岸域は、明日香村飛鳥である。32代崇峻天皇から10代の天皇が宮を置いた地域で飛鳥時代（592～710）118年を刻む。

ソフトを用いて、この飛鳥の飛鳥寺付近から高取山までの断面を描くと、次図のように高取山(583m)の500mより上、約83mの山頂部分が見えることが分かった。今では、飛鳥から高取山が見えることは忘れ去られているが、鷹取山を名付けた当時は、この付近から「飛ぶ鳥の鷹取山が見える」奇跡の場所の認識があったのだろう。このことが「飛鳥（とぶとり）の明日香」という明日香の枕詞になったと思われる。ここに都をおいたことも、この神武と日本武尊の二つの東征の足跡が見える場所だったためと考える。このように飛ぶ鳥の枕詞が先に生まれたと考える。



日本武尊東征に際し、出発地の纏向などに新たに高取山を設定しては後の人が、どの高取山が身延の鷹取山に通じるベクトルなのか混乱すると考えて、神武のベクトルの延長のままに出発し、鷹を高に変更したと考える。このとき鷹取山がよく見える明日香に、飛鳥（とぶとり）の地名を残したのであろう。古代人が、高取山を鷹取山に変更したことを、後世に残そうとした工夫の跡と考える。

東征の中では、様々な事件やドラマが生まれ、それが枕詞として残されたのだろう。例えば「青雲（あおくも）の白肩津」は、神武東征隊が浪速の渡りを行った際に、船が着いた場所の表現である。これも淀川の



水がぬるみ始めた春の気象変化で発生した、早朝の川渡りで見た特別な青い雲を、兵か神武兄弟が発した一言によると思われる。それが東征隊の中で話題になり、一気に広まったのであろう。

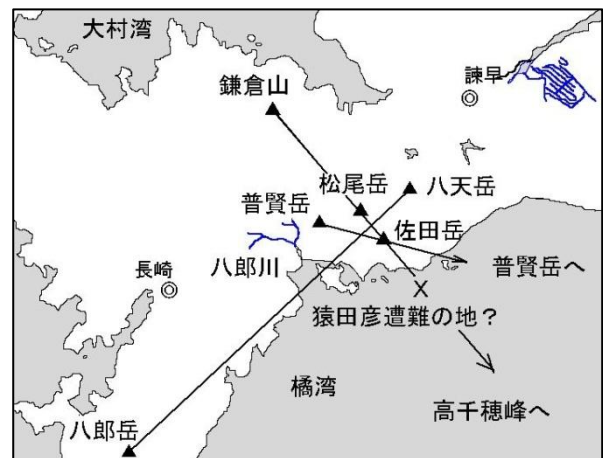
5、明日香の由来

神武東征では、遠征してきた西日本各地の地名が、橿原付近に持ちこまれている。橿原近くの吉備、朝倉、高田などはその例である。天孫降臨で名づけた霧島市横川町の貝吹岡にちなむ貝吹山もある。明日香は、猿田彦が漁をしていて比良夫貝に手を食われて、溺れた場所として古事記が記す、阿邪訶（あざか）に良字を、あてて名づけた地名と考えた。

天孫降臨を先導した猿田彦の働きがあつての、東征と考えていたのだろう。明日香の近くには、猿田彦の本名の佐田彦由来と思われる佐田も見つかる。明日香の近くに佐田を名付けたのは、明日香が猿田彦由来らいであることを残した工夫かも知れない。そのまま阿邪訶をあてては、本来の位置が分からなくなる。また文字も、あまり良くない。後に倭媛命は、この阿邪訶に阿射加（あざか）を充てている。元の「あざか」の音を一部残しながら、良い名に変えるならば、「ざ」の濁音を取り、「さしすせそ」に変える案がまず候補となる。すると「あさか」「あしか」「あすか」「あせか」「あそか」が具体的になる。この中の「あすか」に、東征終わりの地点にふさわしく「明日香」があてられたと考える。

6、阿邪訶（あざか）

ではもとの阿邪訶はどこにある地名であろう。これまでの検討で、天孫降臨の足跡をたどってみて、長崎県諫早市の佐田岳が面する、橘湾の岸边が猿田彦神終焉の地と推測していた。この佐田岳は猿田彦神の、本名・佐田彦に由来し、亡くなった橘湾に面した場所に、名づけられたと考えている。いくつかのベクトルが佐田岳を指し示している。また邇邇藝命を導いた功績を残すように、佐田岳を矢先とした高千穂峰への指し示しも見つかる。この発見の経緯は著書「丘と岡が明かす天孫降臨（2016 郁朋社）」で報告した。



しかし、この付近の地名を細かく調べ、阿邪訶に相当する地名を探したが見つけることはできなかった。解けない課題として残っていたのである。明日香が阿邪訶に由来することが見えてきて、もう一度、調査することにした。「あざか」の読みは、地名としてはあまり見ないので、地名以外を考えてみた。そこで、手を取られた比良夫貝の候補の貝である、しゃこ貝を調べてみることにした。ネットの沖縄方言変換サイトで、しゃこ貝は「アジケー」と呼ぶことが分かった。ケーは貝のことで、いまも沖縄で方言に詳しい人は使っているとのことである。この「アジケー」が転化して、地名にされた可能性は、大いに考えられる。

天孫降臨の南九州遠征で、沖縄の人も途中参加していて、橘湾付近では珍しい貝に、沖縄か

ら参加した人が「これはアジケーという名だ」と答えたと考える。この「アジケー」が人伝えに、「アジケーで亡くなった」と高天原や伊都国に伝えられ、亡くなった原因が、亡くなった場所の名になってしまったと思われる。結局、「アジケー」が「阿邪訶」となり、神武東征最終地点で「明日香」となったのだろう。

7、まとめ

できごとを時系列にまとめた。

- 1) 西暦 230 年頃、猿田彦は天宇受売に送られ、天草から島原半島を経て北部九州にあった高天原に戻る途中、諫早の佐田岳が面する橘湾で、しゃこ貝こと「阿邪訶（アジケー）」に手を取られ溺れ亡くなった。高天原には「阿邪訶で亡くなった。」と伝わった。
- 2) 西暦 270 年頃に始まった、神武東征は熊野から宇陀に進んだのち、吉野巡幸を行い五條市に高取山、高取町に鷹取山を置くベクトルを残した。
- 3) 神武が橿原に即位すると周辺に、東征に参加した人の出身地名や、先人に感謝を込めてゆかりの名前を付けた。甘樫丘の東、わずかに開けた場所には、猿田彦ゆかりの「阿邪訶」に変えて良字「明日香」を名付けた。また、本名・佐田彦ゆかりの佐田も近くに残した。
- 4) 当時、この明日香付近から高取町の「鷹取山」が見えることは、知られていて「飛ぶ鳥の明日香」と呼ばれた。
- 5) 西暦 350 年頃、倭媛命は天照大御神の鎮座地を探す巡歴で、神武が残したベクトルの先、松阪に、猿田彦神を祀る阿射加社を残した。
- 6) 西暦 370 年頃、日本武尊東征の出発に際し、神武東征が残した東へのベクトルに従い出発することにした。この時、高取町の鷹取山を高取山に名を変え出発地のベクトルに変えた。この名の変更を記録するため、この鷹取山が良く見える明日香の中に飛鳥の地名を残した。
- 7) 「飛鳥の明日香」と枕詞に使用している中、「飛鳥」と書いて、「アスカ」と呼ぶ流行りがあったと考える。
- 8) このことにより、ふたつの飛鳥と明日香が生まれた。

以上

参考図書

古事記 倉野憲司校注・岩波書店

全現代語訳 日本書紀（上） 宇治谷孟・講談社

萬葉集一 新潮社

歴史研究第 638 号の「飛鳥」考 浜田裕幸

たかとりが明かす日本建国 白崎勝・梓書院

丘と岡が明かす天孫降臨 白崎勝・郁朋社